



日本キリスト教団
三軒茶屋教会
<http://sanchurch.jp>

三軒茶屋 教会通り

〒154-0024
第37号 2009年11月発行 東京都世田谷区三軒茶屋1-31-5
TEL/FAX: 03-3418-4933
発行: 三軒茶屋教会 広報部

今年もクリスマスを迎えました。この祝日を待ってましたとばかり、町中の人びとが浮足立つような季節となった感じがします。これをとやかに論評することはさておきとして、私たちは今どのように生きようとしているのかを問うことが重要です。今日、不安と苦悩の続く時代において、私たちの身の置き方を考える現代的課題の輪の中に人びとを巻き込んでいくことを試みたいのです。

聖書をひもとくと、紀元前七百年も前に、預言者イザヤは「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。……その名は『…平和の君』と唱えられる」（イザヤ書九の五）と預言しました。やがて来るべき救い主の到来を望み、この期待はついに実現したので、イエス・キリストの誕生、そしてこれを祝う日のクリスマスが位置づけられました。二千年を経た今日、人びとはこの救い主を歓迎し受け入れたと言えるでしょうか。

中世の宗教詩人アングレリウス・シレシウスの詩の中に、「キリスト千度ベツレヘムに生まれしも、汝の中

クリスマスに考えること

牧師 陣内厚生

に生まれざれば、汝はなお永遠に救われず」という言葉があります。つまり、肝腎の私たちの中にイエス・キリストが宿らなければ、救いが訪れたということにはなりません。

クリスマスの上乗事はドラマティックです。星の研究をしていた東方の学者たちは長旅ののち、イエスの誕生をつきとめ礼拝しました。また最下層の職業といわれる羊飼いたちに天使が現れ、「民全体に与えられる大きな喜びを告げる」（ルカ福音書二の一〇）と。そして飼い葉桶の中に寝かされているイエスを探し当て、神をあがめ讃美したとあります。聖書にある絵画的な記述は、しかしイエス・キリストの苦難と犠牲の生涯を暗示するものとなりました。クリスマスの意味するところは、救いは気高い人びと、富裕な人びと、知恵ある人びとに訪れるのではなく、人間の苦悩のどん底に、貧しさや悲しみや淋しさの中にある人びとのもとに訪れるのです。



無教会の指導者だった藤井武の言葉を引用しましょう。「いわゆる幸福な人だけにばかりはなりたくない。そんな時には何かしら狂っている。少なくとも神を慕う心が衰弱している。自分の心ひかれる人びとはみな不幸な人びとだった。彼らは神さまから恵みとして、それを受けたのだ。孤独、迫害、貧乏、病氣……何れにしろこの世では幸福でないのが本当なのだ。なぜと云ってそのくらいは事が解らない人は、まだ人生のいろはも学んでいないのだ。」

さて私たちは、クリスマスから大切な使信を示されていきます。多くの魅力的な楽しみや自己実現をこの際体験しようと思っている人は、少し立ち止まって、わが身に、わが家にイエス・キリストのご臨在を仰いでみましょう。

そこには祈りと対話が必要です。きつと返答があります。

「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。人の子は失われたものを捜し出して救うために来たのである」（ルカ福音書一九の九、一〇）と。クリスマスの真の喜びがここにあります。